

名誉会員，功労章受章者

浅田秋江先生のご逝去を悼む

本会名誉会員浅田秋江先生（東北工業大学名誉教授）におかれましては、約6年に及ぶ癌との闘いの末、去る平成22年3月30日に逝去されました。享年76歳でした。

浅田先生は昭和8年、秋田市でお生まれになりました。文学好きのお父様が作家「近松秋江」に因んで「秋江」という女性のようなお名前をお付けになったと伺っております。文学に因んだお名前は終生浅田先生の一つの特徴を形成したように思えます。昭和31年に東北大学理学部地球物理学科を卒業され、引き続き同大学工学部土木工学科に学士入学、昭和33年に同学科を卒業されました。このご出身もその後の先生の研究足跡に少なからぬ影響を及ぼしたようです。土木工学科をご卒業後、故河上房義教授の薫陶を受けられ、同教授の土質工学講座の助手に就任、昭和42年に講師昇任の後、昭和43年10月に東北工業大学助教授に転出されました。昭和54年には東北大学より工学博士の学位を授与されると同時に、東北工業大学教授に昇任、その後も土木工学科学科長、同大学理事などの要職を歴任され、平成15年に定年退職して、同大学名誉教授として今日に至っております。

浅田先生のご専門は動地盤工学、地盤地震工学で、今日盛んな同分野の嚆矢をなす研究者のお一人に数えられる方かと思えます。とりわけ、構造工学の視点から地盤を捉えて、動的問題を論ずることに研究の特徴がありました。研究者生涯の初期の頃から地盤、アースダムなどの土構造物の地震観測に取組まれ、貴重な業績を残されました。現場での調査と観測に専心する研究姿勢は際立っておりました。ここに、理学部地球物理学科をご卒業された先生の経歴が大きく影響を及ぼしていたと考えられます。当時、まだ知られていなかった常時微動を河川堤防の耐震問題に応用された名論文を河上先生、柳沢栄司先生（東北大学名誉教授）とともに1966年に発表されたことはその好例かと思えます。その他、東北近辺に生じた1964年新潟地震、1968年十勝沖地震、1978年宮城県沖地震、1983年日本海中部地震などの多くの被害地震の被害調査に当たられ、微に入り細にわたる丹念な調査とその分析成果も特筆すべきものかと思えます。このような地震被害に関する注目すべき成果を上げつつも、一方では研究者生涯の後半において、自らの研究哲学と相俟って、ご自分の調査分析結果を容量に関係なく自由に披瀝できるとの信念から、学会誌への投稿という形での成果発表を避け、もっぱら研究成果報告書の自費出版という発表方式に固執しました。このことが膨大な業績の割には、先生の上げた成果が存外知られていない原因をなしているように思われます。ただ、これらの調査報告書は後世の研究者に参考となる貴重なデータを多く含んでいることから、いずれ脚光を浴びる時期があるものと考えられます。

浅田先生は地盤工学会にあっては昭和47年から8年に及び東北支部幹事長を務められた他、昭和54年から3年間にわたり東北支部長に就任され、文字どおり東北支部の屋台骨を支えられました。これらの業績から学会創立30周年の昭和54年に功労章を受賞されるとともに、平成16年には名誉会員に推挙されました。その他、仙台市の宅地開発に関する審議会委員長など多くの委員会の委員を務められるなど甚大な社会貢献を果たされました。

浅田先生は東北大学、東北工業大学での教鞭生活を通して、4500名に及ぶ卒業生の面倒をみられ、地盤工学関係の技術者養成に生涯を捧げられました。一方では、紳士然とした身だしなみで、ダンディな万年青年の趣がありました。タバコ、お酒、ゴルフなどをこよなく愛され、人間味あふれる教育者・研究者であったと思えます。この人間的特質は病を得た晩年、11冊におよぶ専門書、随筆集、紀行文、闘病記、など様々な書物を自費出版の形で発行し続けたお姿に顕著に現れているように思えます。奇しくも最後の著書となった闘病記の刊行に合わせ、静かに息を引き取った見事な最後でした。教育者・研究者としてひたすら努力されたご一生に敬意を表するとともに、これまでのご指導に対して感謝申し上げ、心から哀悼の意を表する次第です。

衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（神山 眞 東北工業大学教授 本学会元東北支部長）
社団法人 地盤工学会

